

神の言葉を食べて生かされる

山元眞

やまもと・まこと

行橋カトリック教会司祭

地方や教会共同体によって違いがあるとは思うのだが、日々の生活の中で、聖書はなかなか人々に定着しないようである。人々に、というより信者（考えられないかもしれないが、司祭も含めて）に……である。洗礼を受ける準備をしている求道者から、ときどき聞かれることがある。「信者の方って、みなさん聖書を読んでいらつしやるんでしょ。よく知っていらつしやるんでしょ」と。残念だが、現実には「ノー」といっていい。

カトリック教会では、毎週の主日（日曜日）のミサでその一部が朗読され、救いの恵みを思い起こし、感謝と賛美をささげる。「聖書と典礼」という便利なパンフレットも作成され、それを手元に置いて、朗読される「神の言葉」を追っていく。だが……。聖書はほとんど読まれていない。ミサで使われた「聖書と典礼」は元あったところに無造作に置かれ、後はどうなるのか……。「家のゴミ箱に捨てるのも何だし……。」といつて、なかなか持つて帰ってくれない。たった今聞いた神の言葉、癒し、力づけられた命の言葉。ミサが終わつたら、もう用は無いのである。

少し長くなるが、マルコ福音書の専門家であるJ・ドローム氏の言葉を引用したい。

「わたしたちには福音書をこまぎ

れにして読む習慣がある。ところが、マルコ福音書を通読してみると、それが一つの美しいまとまりを形成しているのに気づいて驚くのである。いわば、パイナップルといえば缶詰の中の輪切りにしたものしか知らなかった者が、それは本来一個のりっぱな果実なのだということを発見して驚くようなものである。わたしたちはいつもマルコを缶詰から食べているのだが、それは極めてうまく加工され殺菌されているので、マタイともルカともほとんど区別できない味をしている。けっきょく各福音書の断片は、もはやそれぞれの風味などどめていないのである。」（J・ドローム著『マルコス福音書の読み方』中央出版社）

ミサでの聖書朗読を聞くのは「輪切りのパイナップル」を食べるよう

なもの。加工され、殺菌されたパイナップル。それをいつも食べているようなもの。だから、もう味はわかっていて思い込んでしまう。司祭も信者も「あー、この話は知っている」「この話は前に聞いたことがある」と思い、今日、今、ここで、新たに語りかけている神の声が聞けない。



信者であれば、聖書の本は持っているだろう。だれでも初めは「がんばって」読もうとしたかもしれない。マタイ福音書を読み始めて、最初の「系図」でつまずいた人もいるだろう。目に触れていた本が次第に本棚の隅に追いやられ、それが横に積まれるようになり、開かれることなく

棚の中で眠ってしまふ……のは、よくあることではないだろうか。聖書は永遠のベストセラーだといわれる。多くの人がその本を持っているだろう。でも、どれだけ読まれているのかは疑問である。

かくいうわたしも、長いあいだ「読まなければならない本」だから読んできた。「知っておかねばならない本」だから読んでいた。でも、そうするうちに、この本は本ではなく、食べ物だということに気づいてきた。「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ四章四節、申命記八章三節)ということが少しずつわかってきた。聖書で伝えられた神の言葉と教え(神の想い)は、わたしを癒し、慰め、励まし、力づけてくれる。

イエスのたとえ話。たとえば、ルカ福音書の第十五章に記され、伝えられてきた三つのたとえ話。ここにも神のわたしたちへの想いが記されている。「見失った羊」のたとえ、「無くした銀貨」のたとえ、そして「放蕩息子」のたとえ、と新共同訳聖書は小見出しをつけているが、こ

の三つのたとえに共通しているテーマは、失ったものを見つけ出した人の喜びである。たとえば、羊(動物)から銀貨(物)、息子(人間)へと進んでいく。中心は無くなったものではなくて、無くした人であり、無くしたものを見つけ出した人の喜びである。

かつて、このたとえ話の中心は「放蕩息子」であったような気がする。少なくともわたしは、そのように読んできた。実際、このたとえは回心式のときなどに罪を糾明(自分の犯した罪を思い起こすこと)する助けとして読まれていたような気がする。自分を放蕩息子にたとえて、自分がいままでしてきた悪いことを思い出すのである。そうして「神に申し訳ない」から神の元に戻りましょう、という図式。中心は「自分」だった。でも、このたとえ話を三つまとめて読むと、この話の中心が「自分」ではなくて、「見失った人」であることに気づく。このときから、このたとえ話を読み、聞くたびにうれしくてたまらなくなった。それまでは暗い気持ちになっていた

のに……。

神から離れたのはわたしなのに、神は自分のせいにする。神は羊も銀貨も息子も、だれも責めない。神は自分が見失った、という。父の元から離れていった息子に対してでさえ……。離れていったのは息子なのに、見つけると自分から「走り寄って」息子を抱き止める。神は自分を責めているようにさえ見える。だから、ここから喜ぶ。よかった! と。

これが、イエスが示し、弟子たちが伝えてきた神の愛の表現である。それなのに、人はいつのまにか、この「非常識」を「常識」に変えてしまった。もっと「きちんと」しなければ、もっと「清く、正しく、美しく」生きなければ神はわたしのほうを向いてくれない、わたしを受け入れてくれない、わたしを救ってくれないと。これでは、わたしたちはいつまでたっても救われない。イエスが伝えた福音は、わたしたちの常識が想像をはるかに超えている。だから……福音なのだろう。神の言葉にもっともっと触れたい。もっと食べたい。